

資料紹介「建築家中村順平関係資料（市原隆夫旧蔵）」

青木 祐介

1. はじめに

横浜都市発展記念館では、令和元（2019）年4月に千葉市在住の市原徹氏から建築家中村順平関係資料全6件48点の寄贈を受けた。資料は同氏の父親である市原隆夫の手元に残されていたもので、横浜高等工業学校建築学科（現・横浜国立大学都市科学部建築学科）の主任教授を務めた建築家中村順平（1887～1977、図1）に関する資料である。パリに留学し、日本人建築家として初めてエコール・デ・ボザール（国立高等美術学校）を卒業した中村順平は、帰国後の大正14（1925）年4月、横浜高等工業学校に新設された建築学科の主任教授に就任し、昭和25（1950）年に同校を退職するまで、ボザール仕込みの独自の建築家教育を実践した¹。同校からは中村の薫陶を受けた建築家たちが多く世に出ており、本資料の原所蔵者である市原隆夫（1917～2000）もその一人である。



図1 教員室での中村順平 市原徹氏所蔵

市原は、昭和13（1938）年3月に横浜高等工業学校建築学科を卒業すると、満州にわたって満州国国務院建設局宮廷造営課に勤務したのち、昭和17（1942）年1月から翌年10月までの期間、母校の建築学科に勤めている。そして終戦後の昭和24（1949）年9月からは、同窓の吉原慎一郎（昭和4年卒）が設立した創和建築設計事務所（現・株式会社創和設計）に勤務し、建築家としてのキャリアを築いた²。市原の手元に残されていた資料は、刊行物や複写資料が中心であるが、なかでも複写資料に関しては、市原同様、中村順平の弟子たちの間で共有されていたものが多く、本資料の性格をよく物語っている。

中村順平による原画・スケッチ・自筆原稿など一次資料の多くは、中村の死後、彼の教えを受け継いだ弟子たちを中心に結成された「檜の会」のもとで保管されていたが、平成18（2006）年度以降、同会および同会メンバーを通じて、複数回にわたって大阪歴史博物館に寄贈されている³。また中村が手がけた船内装飾の関係資料については、同会を通じて三菱重工長崎造船所史料館に寄贈されており、その他、日本郵船歴史博物館、横浜みなと博物館にも、同会メンバーから関係資料が寄贈されている。

これらの資料のうち、原画やスケッチ、写真など一部については、弟子たちの間で複写が広く共有されていたことがわかっており、本資料

- 1 中村順平の生涯については、横浜高等工業学校建築学科の第一期卒業生である網戸武夫による評伝『情念の幾何学 形象の作家中村順平の生涯』（建築知識、昭和60年）を参照。
- 2 「市原隆夫履歴書」（市原徹氏所蔵）より。
- 3 同館に寄贈された中村順平関係資料については、『館蔵資料集5 建築家・中村順平資料』（大阪歴史博物館、平成21年）、『館蔵資料集14 建築家・中村順平資料2』（大阪歴史博物館、平成30年）の2冊の資料集が刊行されている。

もそうした経緯で市原隆夫の手元に集まったものと考えられる。しかし本資料に含まれる複写写真のなかには、現時点でオリジナルの所在が確認されていないものも含まれており、二次資料であっても複写の経緯をはじめとする内容の検討を要する。

そこで本稿では、市原隆夫旧蔵資料を多くの弟子たちの手元に分散して残された中村順平関係資料のひとつとして位置づけ、資料目録とあわせて複写写真全点の画像を掲載し、その内容について紹介したい。

2. 横浜における中村順平の設計活動

資料の概要を紹介する前に、まずは多岐にわたる中村順平の業績のうち、横浜での設計活動について簡単にまとめておきたい。

横浜高等工業学校で長きにわたって教鞭を執り、多くの優れた設計者たちを世に送り出した中村順平であるが、本人の実作として現存するものは意外に少ない。中村順平の設計作品について、酒井一光は中村自筆の「仕事歴」「経歴書」（いずれも大阪歴史博物館所蔵）をもとに、①渡仏前の曾禰中條建築事務所時代に設計した建築、②船内装飾、③独立後に設計した建築・壁面彫刻・壁画、の3つに分類して全容を明らかにしているが⁴、横浜市内における中村の仕事は下記の7件が挙げられている。

- A. 保土ヶ谷曹達株式会社愛染明王堂（昭和10年頃、現存不明）
- B. 横浜高等工業学校「名教自然」石碑（昭和12年、移設保存）
- C. クリフサイド（昭和21年、現存）
- D. 日本貿易博覧会壁画（昭和24年、現存せず）
- E. Yukiya洋裁店（昭和31年、現存せず）
- F. 尾上美粧院（未実施）

- G. 横浜銀行本店営業室壁面彫刻（昭和35年、移設保存）

このうち中村順平の業績として著名なものは、横浜高等工業学校の初代校長鈴木達治を記念して昭和12（1937）年に建立された「名教自然」の碑（B）、そして昭和35（1960）年に完成した横浜銀行本店営業室の壁面彫刻（G）であろう。

「名教自然」の碑は、昭和10（1935）年に鈴木達治（煙洲）が同校校長を辞した際、当初あがった銅像建設の話を煙洲本人が固辞し、代わりに記念碑として同校の敷地内に建てられたものである⁵（図2）。茨城県産の大理石を用いた高さ6.6mの石碑で、正面には、煙洲の教育理念である「名教自然」の文字が煙洲の自筆で刻まれ、裏面には徳富蘇峰による撰文が原富太郎（三溪）の筆により刻まれている。昭和53（1978）年に横浜国立大学の常盤台キャンパスが完成した際、同碑もあわせて現在地に移設され、平成12（2000）年には国登録文化財となっている



図2 名教自然の碑 市原徹氏所蔵

壁面彫刻は、中村順平の戦後の設計活動のなかで大きな位置を占めている。東京駅RTO待合室壁面彫刻（昭和22年、移設保存）や山口銀行本店営業室壁面彫刻（昭和40年、現存）など、中村は壁面彫刻の大作を幾つも手がけているが、横浜銀行本店営業室の壁面彫刻もその

4 酒井一光「建築家・中村順平の設計活動についての一考察」『平成25年度日本建築学会近畿支部研究発表会』（平成25年）

5 鈴木達治述『名教自然碑の由来と教育私見の断片』（煙洲会編、小汀浩一郎、昭和32年）

ひとつである⁶。横浜の産業発展をテーマに、湘南地方の農業や鶴見・川崎方面の重工業をモチーフとして表現したレリーフは、2段36列の合計72枚のパネルからなり、高さ3.7m、長さ50mにおよぶ。中村の補佐には平尾榮美（昭和18年卒）が就き、製作は田島順三製作所（現・三和タジマ株式会社）が担当した。関連資料としては、昭和35（1960）年3月30日の日付をもつ縮尺1/20の構成原図が大阪歴史博物館に収蔵されており⁷、また水彩で描かれた構成原図が横浜みなと博物館に収蔵されている⁸。

平成5（1993）年9月に横浜銀行の新本店がみなとみらい地区にオープンすると、解体予定の旧本店に残された壁面彫刻に対する保存運動の機運が高まり、田辺謙輔（昭和8年卒）を会長とする「壁面彫刻保存の会」が結成された。中村の門下生のみならず、幅広い人脈を得ておこなわれた同会の活動の結果、壁面彫刻は移設保存される運びとなった。現在、横浜銀行の銘が入った中心部の5列（10枚）は横浜銀行の新本店に移設され、左端3列と右端2列を除いた31列が、平成16（2004）年2月に開業した横浜高速鉄道みなとみらい線馬車道駅の地下コンコースの壁面に設置されている⁹（図3）。また左端3列のうち2列（4枚）は、横浜国立大学の建築学棟1階ロビーに移設展示されている。

その他の設計作品のなかでは、終戦翌年の開業という歴史をもつダンスホール「クリフサイド」（C、図4）が、現在も現役の施設として親しまれている。空襲で住まいを失った中村は、昭和21（1946）年5月から、本牧にある弟子の蒲生久敏（昭和9年卒）宅に身を寄せており、



図3 馬車道駅のレリーフ 令和元（2019）年撮影

クリフサイドはその時期の設計と考えられる。同年8月に蒲生は急逝するが、家族はその後も中村に住まいを提供し、変わらぬサポートを続けた。その謝意として、中村が蒲生未亡人の妹夫婦のために設計したのが、Yukiya洋裁店（E）である¹⁰。同じく商業施設の尾上美粧店（F）については、ファサードの透視図と縮尺1/50の立面図・平面図を一枚に収めた図面が残されている（大阪歴史博物館所蔵¹¹）。これらの作品はいずれも、酒井の報告により、初めて中村順平の設計であることが明らかになった。



図4 クリフサイド 令和元（2019）年撮影

以上が、横浜における中村順平の設計活動で

6 本壁面彫刻と移設保存の概要は、田辺謙輔「中村順平作横浜銀行壁面彫刻保存の会てん末の記」『水煙会会報』第24号（平成6年12月）、『中村順平作 横浜銀行旧本店壁面彫刻の復元』（壁面彫刻保存の会、平成16年）、長田喜樹『中村順平の軌跡 馬車道駅開業十周年を祝して』（一般財団法人神奈川建築安全協会、平成26年）を参照。

7 前掲注3『館蔵資料集5 建築家・中村順平資料』掲載。

8 『開館25周年記念展 船の旅と横浜港 秘蔵コレクション』（横浜みなと博物館、平成26年）掲載。

9 横浜銀行新本店に移設された5枚分はレプリカとなっている。

10 酒井一光「中村順平が設計した商店建築 Yukiya洋裁店と尾上美粧店について」『大阪歴史博物館研究紀要』第11号（平成25年）

11 前掲注3『館蔵資料集5 建築家・中村順平資料』掲載。

あるが、昭和29（1954）年には、横浜開港100周年記念事業として計画された横浜市庁舎の指名設計競技において、当時早稲田大学教授であった今井兼次、横浜国立大学教授の佐藤鑑らとともに、中村は基本設計案選定審査委員を務めている。門下生である吉原慎一郎（昭和4年卒）が主宰する創和建築設計事務所（現・株式会社創和設計）をはじめ、山下寿郎設計事務所（現・株式会社山下設計）や前川建築設計事務所などが参加しておこなわれた設計競技は、最終的に村野藤吾（村野・森建築事務所）の案が基本設計案として選定された。

その後、昭和31（1956）年3月には第4回横浜文化賞を受賞、同34（1959）年5月には日本芸術院賞を受賞し、同51（1976）年11月には勲三等瑞宝章を受章している。そして昭和52（1977）年3月24日、中村順平は90歳でこの世を去った。

3. 再評価がすすむ建築家中村順平

中村順平の没後、翌年から月刊誌『建築知識』誌上で、第一期卒業生である網戸武夫（昭和3年卒）による連載「建築家外伝 中村順平」が始まったことからわかるように¹²、中村順平の業績は、おもに弟子たちによって語り継がれてきた。とくに網戸の連載をもとにまとめられた評伝『情念の幾何学 形象の作家中村順平の生涯』（昭和60年）¹³は、中村が残した多くの一次資料にもとづいたきわめて精緻な内容で、現在にいたるまで、中村順平を知るための基本文献となっている。

当時の弟子たちの大きな動きとしては、「檜の会」の組織化が挙げられる。昭和57（1982）年5月、馬車道十番館で開催された「中村順平忌」の場で会の結成が決議され、同年11月に第1回集会が開かれた¹⁴。世話人代表には網戸武夫が就任し、以後、会誌の発行や土曜会の開催などの活動を継続的におこなってきた¹⁵。

また昭和62（1987）年6月には、同会が中心となって「建築家中村順平生誕百年記念回顧展」が横浜市民ギャラリーで開催された（6月16日～21日）。展覧会の全体構想は網戸が担当し、展示の手法から個々のパネルの内容まで、網戸を中心に他の委員がサポートするかたちで準備が進められたという¹⁶。会場では、中村のボザール時代の図面や横浜高等工業学校での建築図面の課題、建築科大行進のポスターなど、のちに大阪歴史博物館に寄贈されることになる貴重な資料群が展示された。

こうした弟子たちの活動により、日本人で初めてボザールを卒業した建築家、芸術面に重点を置いたボザール流の建築教育で多くの建築家を輩出した教育者、20隻以上におよぶ客船のインテリアを設計したデザイナー、といった中村順平像は早くから成立していたといえる。網戸と同時代に書かれた三宅理一による論考¹⁷、1990年代に入って意匠論の立場から書かれた南原七郎の論考¹⁸も、こうした中村順平像を積み重ねるものであった。そのなかで、2000年代初頭に発表された黒石いずみの論考¹⁹は、ボザール流の教育により踏み込んだものとして注目される。

12 網戸武夫「建築家外伝 中村順平 第1回～第34回」『建築知識』（昭和53年4月～同56年8月）

13 前掲注1

14 成沢福松「『中村順平忌』の集まり」『水煙会会報』第12号（昭和57年11月）、成沢福松「中村順平先生を偲ぶ催し三つ」『水煙会会報』第13号（昭和58年12月）

15 檜の会は、平成21（2009）年に会報発行を中止し閉会となったが、現在も有志により活動は続けられている（同会HPより）

16 林久満「“建築家中村順平生誕百年記念回顧展”について」『水煙会会報』第17号（昭和62年12月）

17 三宅理一「近代日本の異色建築家16 強烈な異国体験に生きた孤高の建築家 中村順平」『科学朝日』（昭和58年4月）、のち『近代日本の異色建築家』（近江栄・藤森照信編、朝日新聞社、昭和59年）に収録。

18 南原七郎「建築という芸術の提唱者 中村順平」『デザイン理論』（平成4年11月）

19 黒石いずみ「フランス外でのエコール・デ・ボザール」『青山学院女子短期大学紀要』第56号（平成14年12月）

そして中村順平研究が進展する大きな転機となったのが、冒頭に述べたとおり、平成18（2006）年度に、「檜の会」（当時の代表は昭和17年卒の松本陽一）から関係資料が大阪歴史博物館に寄贈されたことである。その後も網戸武夫、吉原正（昭和17年卒）、青木榮（昭和15年卒）、大西春雄（昭和17年卒）、松本陽一、歌崎昌太（昭和13年卒）ら弟子たちの旧蔵資料が続けて同館に寄贈されており、その概要は同館が刊行した2冊の資料集から知ることができる²⁰。

同館では、これらの資料をもとに、特集展示「生誕120年 大阪が生んだ異才 建築家中村順平」展（平成19年5月30日～7月9日）、同「中村順平 建築芸術の研究」（平成24年4月4日～5月28日）、同「中村順平と建築芸術教育」（平成27年6月3日～8月3日）を立て続けに開催してきたが、こうした展覧会を通じて中村順平の再評価が進んでいった点も、2000年代以降の大きな特徴である。

弟子たちによる回顧展をのぞいて、公立の博物館施設で開催された早い時期の展覧会としては、平成3（1991）年に、順平の父中村譲芝の出身地である東大阪市の市立郷土資料館で開催された「中村順平展 建築芸術家のドローイング」（10月22日～12月23日）がある。のちに大阪歴史博物館に寄贈される資料などが、すでにこの展覧会で紹介されており、2000年代以降の中村順平再評価の原点になった展覧会と位置づけられよう。

そして前述の大阪歴史博物館での特集展示に加えて、日本郵船歴史博物館での「洋上のインテリア」（平成19年3月3日～9月2日）、「洋上

のインテリアⅡ」（平成23年8月6日～11月27日）、横浜みなと博物館での「豪華客船インテリア画」展（平成22年2月20日～4月11日）、「船の旅と横浜港―秘蔵コレクション」展（平成26年4月19日～5月18日）、INAX ギャラリー名古屋での「にっぽんの客船 タイムトリップ展」（平成22年12月14日～同23年2月17日）など、中村順平の業績のなかでも、とくに展覧会に映える船内装飾を取り上げた展覧会が、2000年代から一気に増えていった。

また横浜銀行本店営業室の壁面彫刻がみなどみらい線馬車道駅に移設されてから10年目の平成26（2014）年に、一般財団法人神奈川県建築安全協会の主催で開催された「中村順平の軌跡 馬車道駅開業十周年を祝して」（10月16日～27日）では、わずか12日間の開催期間ながら、大変充実した配布資料が発行されており²¹、中村順平の業績と現在にいたる研究の流れをあらためて俯瞰する機会となった。

こうした展覧会での再評価と並行して、2010年代には、中村順平研究にも大きな深化がみられた。林要次は、中村順平が自身の建築理論と建築教育のなかに、当時のフランスの建築理論をどのように受容したのかという観点から、精緻で実証的な研究を積み上げ²²、吉田鋼市は、近代日本の建築家たちをグローバルなアール・デコの潮流に位置づけるなかで、中村順平の再評価を試みている²³。

また平成28（2016）年度からは、大阪歴史博物館が所蔵する中村順平関係資料に関する共同研究がスタートしており、中村順平の建築設計、船内装飾、建築教育のそれぞれの活動に対して、

20 前掲注3

21 前掲注6、長田喜樹『中村順平の軌跡 馬車道駅開業十周年を祝して』

22 林要次「中村順平にみるエドワー・アルノーの影響 近代日本におけるフランス建築理論の受容に関する研究（その1）」『日本建築学会計画系論文集』（平成26年5月）、同「中村順平の『建築学』草稿」にみるフランス建築理論 近代日本におけるフランス建築理論の受容に関する研究（その2）」『日本建築学会計画系論文集』（平成26年12月）、同『近代日本におけるフランス建築理論と教育手法の受容―中村順平の理論と教育を中心として―』（横浜国立大学学位請求論文、平成27年）など。

23 吉田鋼市「中村順平のレリーフ」『日本のアール・デコ建築入門』（王国社、平成26年）、同「中村順平―ボザール流アール・デコ」『日本のアール・デコ建築家 渡辺仁から村野藤吾まで』（王国社、平成28年）

酒井一光、海老名熱実、林要次の3氏により、さらに踏み込んだ研究が進められている²⁴。

こうして弟子たちの間に分散していた関係資料が少しずつ集積・公開されていく現在、中村順平研究にはあらたな可能性が開けている。酒井は、今後の課題として「個人が所蔵する資料の解明」を指摘しているが²⁵、本稿で紹介する市原隆夫旧蔵資料は、これまで知られていなかった個人所蔵資料のひとつであり、その公開に大きな意味をもつものである。

4. 資料概要

資料は別掲目録のとおり、全6件48点からなる。

資料1は、横浜高等工業学校の初代校長を務めた鈴木達治（煙洲）の一周忌に際して、追悼録として発行されたもので、同校卒業生を中心に鈴木煙洲の思い出が収録されている。発行者である煙洲会は、卒業生たちが煙洲を招いて話を聞く会として、昭和14（1939）年6月に開催したのが始まりで、以降、毎月欠かさず第4水曜日に開催され、煙洲が亡くなる2か月前までに計219回が開催された²⁶。昭和36（1961）年8月に煙洲が亡くなると、横浜国立大学工学部（当時）では学部葬がおこなわれ、建築学科卒の吉原慎一郎（昭和4年卒）が会場となった工学部講堂の室内装飾を担当した²⁷。また墓所のデザインは、煙洲が同校を退職した昭和10（1935）年の5月31日に、中村順平によって建築学科の設計課題「十六時間エスキスエスキス」として出題されており、小泉勝世（昭和8年卒）の設計案が銀賞を受賞し、採用された²⁸。

資料2は、中村順平の米寿記念として開催された「日本古典建築遺構建築図画」展に関連して刊行されたもの。同展覧会は、中村が建築学科の学生たちに課した「建築図画」の課題のうち、日本の古典建築を主題とした67点を展示したもので、昭和49（1974）年5月17日～22日に東京新宿の小田急ハルクで開催されたのち、大阪・広島・福岡・名古屋（翌年開催）と各地を巡回した。本資料は、解説と評論を網戸武夫が担当しており、「1 はじめに 序章・原点」「2 表現」「3 成立」「4 様式」「5 終章」の全5章で構成される。

資料3は、平成2（1990）年6月から翌年7月にかけて、一般社団法人全日本建築士会の会誌『住と建築』に連載された「網戸武夫の住宅設計塾」全14回のコピーを綴じたもの。表紙には、『EXPERIENCE 経験 1・2・3』のタイトルと「ARCHITECT Takeo AMITO」の著者名が手書きで入れられており、裏表紙には著者印とあわせて「1999」の年号が書き込まれている。この年の12月、連載「網戸武夫の住宅設計塾」は再編集を経て、網戸の自伝的住文化論『建築・経験とモラル』²⁹として刊行されており、本資料はその前段階として、関係者への配布用に網戸自身によって作成されたコピーと思われる。

資料4は、昭和62（1987）年6月に横浜市民ギャラリーで開催された「建築家中村順平生誕百年記念回顧展」（6月16日～21日）に関連する資料が中心で、展覧会に際して配布された記念品贈呈用の袋に収められている。袋には中村順平がデザインした檜章が大きく印刷され、

24 「共同研究成果報告書12 中村順平のスケッチブックと図面類の画題・作画時期解明に関する研究」（大阪歴史博物館、平成30年）

25 酒井一光「建築家・中村順平資料について」前掲注3『館蔵資料集5 建築家・中村順平資料』

26 管要助「序文」『先生の思い出』（煙洲会、昭和37年）

27 鈴木博人「出版に際して」『先生の思い出』（煙洲会、昭和37年）

28 『横浜高等工業学校建築学科 建築競技設計図集 自昭和二年至昭和十二年』（横浜高工建築学科教室出版会編、洪洋社、昭和12年）、「鈴木名誉教授生前にお墓建設計画成る」『横浜高工時報』（昭和10年7月3日）。

29 網戸武夫『住まい学大系098 建築・経験とモラル』（住まいの図書館出版局、平成11年）

「S62」「市原」との書き込みがある。

4-1は、同展覧会で配布された小冊子で、中村順平の著作『建築学』第一冊総説編（昭和19年）³⁰、『建築学』第二冊技術編（昭和25年）³¹、『建築という芸術』上下（昭和53年）³²の4冊からの抄録を、「Ⅰ 建築について」「Ⅱ 日本建築について」の二部構成でまとめたもの。編集責任として網戸武夫と歌崎昌太（昭和13年卒）の名前が記される。

4-2は、同展覧会のパンフレット。展覧会の挨拶文と中村順平の経歴などが記載される。

4-3は、同展覧会の案内はがき。裏面には中村が設計した樫原丸1等ラウンジ（実現せず）のカラースキームが印刷されている。

4-4は、中村順平によるバリ・オペラ座のスケッチが裏面に印刷された未使用葉書。同展覧会で配布された一枚と思われる。

4-5は、同展覧会のパンフレット（4-2）に使用された中村順平の人物写真を複写したもの。前述の網戸武夫による連載では、田島順三製作所階段室の壁面彫刻を制作中の姿として紹介されている³³。

4-6は、「建築図画」をプリントしたもので、内容は「桃山期之研究」と「奈良法隆寺中門全景及断面詳細図」の2点。建築図画については、平成11（1999）年頃から、卒業生の谷喜夫（昭和14年卒）の呼びかけによって図集発行の企画が進められていた³⁴。その過程で、大西春雄（昭和18年卒）が原画を撮影したガラス乾板をもとにデジタルデータを作成しており、そのデータをもとに仁瓶俊介（父の仁瓶進一が昭和10年卒）がハガキ大の私家版を作成して関係者に配布したという³⁵。本資料はその複製に相当す

ると思われ、市原もこのときに入手したのであろう。

4-7は、「桧の旗に就て」と題されたメモ。「桧の旗」とは中村順平が図案を考案した檜章旗のことで、横浜高等工業学校から巣立っていく教え子たちや、戦地に向かう教え子たちへ、師弟の絆として贈られたという³⁶。本資料はそのオリジナルの製作数やサイズ、生地、製作者についてのメモ。現在、檜章旗は大阪歴史博物館が所蔵している。

資料5は、建築学科の名物であった「建築科大行進」に関する資料を複写したもの。写真はすべて116mm×166mmの小キャビネサイズで、大阪の写真館から市原宛に送られてきた封筒に入れている。消印の日付が昭和53（1978）年8月であることから、前年3月に中村順平が亡くなったことを受け、当時大阪の中村家にあった関係資料に対して弟子たちの間で何らかの調査の動きがあったことを示唆するものである。撮影された資料の大半は、のちに檜の会を通じて大阪歴史博物館に寄贈されたものであるが、一部所在が不明なものも含まれている。

建築科大行進は、横浜高等工業学校の秋の記念祭にて、エコール・デ・ボザールにおける芸術祭行進バル・デ・ギャザール（Bal des 4-Z Arts）にならって建築学科の催しとしておこなわれていたもので、中村順平が毎年のテーマ設定をはじめ、山車や衣装のデザイン、ポスターの制作まで手がけていた。昭和3（1928）年に第1回がおこなわれ、昭和11（1936）年の第8回までの開催が確認されている。大行進の年ごとの開催概要は、次頁表1のとおりである。全35点の写真は、大阪歴史博物館および日本郵

30 中村順平『建築学 総説篇』（土木雑誌社、昭和19年）

31 中村順平『建築学 技術篇』（中村塾出版会、昭和25年）

32 中村順平『建築という芸術』上下（相模書房、昭和53年）

33 網戸武夫「建築家外伝 中村順平 第34回 その人その生涯（終章）」『建築知識』（1981年8月号）

34 前掲注6、長田喜樹『中村順平の軌跡展 馬車道駅開業十周年を祝して』

35 林要次氏のご教示による。

36 前掲注3『館蔵資料集14 建築家・中村順平資料2』、「檜章旗」の資料解説より。

船歴史博物館所蔵の中村順平関係資料を参考に、建築科大行進の①ポスター、②山車・衣装デザイン、③写真の順にまとめて、それぞれ年代順に枝番号を付けた。

5-1～5は、第4回から第8回までの建築科大行進のポスターで、いずれも中村順平が各回の主題をもとにデザインしたもの。この5回分のポスターのオリジナルは、すべて大阪歴史博物館に収蔵されているが、その他の回のポスターは現時点で確認されていない。

5-6～24は、同じく第4回から第8回までの建築科大行進の山車と衣装のスケッチ。これらもすべて中村がデザインしたもので、一部のものには、鉛筆書きで主題と年代、中村のサインが書かれている。これらも原資料の大半は大阪歴史博物館に収蔵されているが、第4回「光ハ東方ヨリ」の山車と衣装のデザイン（5-6～8）、第5回「大アジア主義」の衣装デザイン（5-10, 11）の5点については、同博物館の所蔵資料には含まれていない。

5-25～33は、大行進当日の様子を撮影した写真。撮影年は山車と衣装のデザインから判断した。このうち5-25, 28, 29, 31～33の6点につい

ては、平尾榮美（昭和18年卒）から日本郵船歴史博物館所蔵に寄贈された写真アルバムにも同じものが含まれており、弟子たちの間で写真を複写して共有していたことが確認できる。

5-34は、中村順平がエコール・デ・ボザールの卒業制作として提出した図面の一枚で、パリ日本大使館によるパリ市大学街日本館計画にもとづいて設計したもの。原図は大阪歴史博物館が所蔵している。

5-35は、関東大震災の知らせを受けて帰国した中村順平が手がけた東京の震災復興計画図で、各所に配置された広場を放射状の街路でむすぶバロック的な都市計画図として知られたもの。原図は大阪歴史博物館が所蔵している。

以上の複写写真35点のうち、最後の2点だけが建築科大行進とは異なる内容である。中村順平の設計資料は他にも多数あったはずであるから、あるいは撮影されながら今日までに散逸してしまったのかもしれない。

資料6は、日本と西洋の古典建築を主題とした課題「建築図画」のコピーを集成したファイル。中村が学生に示した構図のスケッチが左側に、その構図に従って学生が仕上げた図画が右

表1 建築科大行進の概要

	開催年		主 題	風 俗	山 車
第1回	1928	昭和3年	天壤無窮	ギリシャ時代	王朝風の鶏首の船にギリシャの武士が槍をかざして乗る
第2回	1930	昭和5年	ARS LONGA	アテネ祭	天馬に乗ったギリシャ武士
第3回	1931	昭和6年	精神文化之勝利	14世紀	ゴシック寺院（アルスの玉座）
第4回	1932	昭和7年	光ハ東方ヨリ	ナポレオン時代	「建築の玉座」に座すナポレオン。「NEO NIPPON」の文字が見える
第5回	1933	昭和8年	大アジア主義	秀吉の軍勢とエチオピア軍勢、これに配するアジア諸民族の風俗	象に乗る秀吉。象は竹筆紙貼り
第6回	1934	昭和9年	文芸復興	ルネッサンス	唯物思想の墓
第7回	1935	昭和10年	日本文化ノ独立	古代ギリシャ	船上のゼウス（左右から奴隷が動かす）
第8回	1936	昭和11年	芸術之歓喜	15世紀	ブラスバンド、松明、槍、タンバリンの男、アコーディオン奏者、旗持ち踊り手等

* 網戸武夫「中村順平のカラースキーム」『建築知識』（昭和56年1月号）より

側に配置され、見開きで収められている。図画のコピーは全113点で、その内訳は日本の古典建築が58点、西洋の古典建築が55点である。そのほか同資料には、平成4（1992）年5月の日付をもつ「横浜高工・工専建築学科 日本・西洋建築図画作品目録 昭和3年卒～昭和23年卒」が収められている。目録には各年の卒業生の課題一覧のほか、中村順平の著書や米寿記念の建築図画展などで紹介されたものについては、その旨と掲載ページが記載されている。目録を編集したのは、当時広島工業大学で教鞭を執っていた谷喜夫（昭和14年卒）で、前述のとおり、谷が中心となって建築図画の原画やネガの収集作業がおこなわれ、図集の出版が企画されていた。この作業の過程で、建築図画のコピーが多く関係者の手元に渡っており、おそらく市原も何らかの形でこれらのコピーを入手したのであろう。

5. おわりに

以上、市原隆夫旧蔵の建築家中村順平関係資料について、その概要を紹介した。

中村順平関係資料は、中村の没後、長きにわたって弟子たちの手元で保管されてきた経緯があり、彼らが熱意をもって師中村順平の教えを受け継ぐ活動を続けてきたことが、結果として、資料の散逸を防ぐことにつながった点を忘れてはならない。

一方で、本資料の分析を通して、建築科大行進の衣装デザインなどいまだ所在が確認されていないオリジナル資料があることも判明した。酒井が指摘した「個人が所蔵する資料の解明」は、中村順平研究を進めるうえで今後ますます重要になってくるであろう。そして教え子たちの手元に分散して残された資料を発掘していくことは、建築家として、また建築教育者としてのあらたな中村順平像を組み立てることにつながるであろう。本稿で紹介した市原隆夫旧蔵資料がその一助となれば幸いである。

最後に、貴重な資料をご寄贈くださいました市原徹氏、寄贈の仲介をくださった金出ミチル氏にこの場を借りて御礼申し上げます。横浜みなと博物館元館長の志澤政勝氏、日本郵船歴史博物館の遠藤あかね氏からは、館蔵資料についてご教示を賜りました。また中村順平の関係資料と最新の研究動向については、大阪歴史博物館での共同研究「中村順平の設計活動と建築教育に関する研究」に参加することで多くの知見を得ました。参加の機会をくださった大阪歴史博物館、共同研究者としてさまざまにご教示いただいた故酒井一光氏、海老名熱実氏、林要次氏の3氏に感謝申し上げます。

中村順平関係資料（市原隆夫旧蔵）

〔凡例〕

- 1 資料名のうち原題のないものについては、〔 〕を付して内容を記載した。
- 2 資料年代は和暦で統一し、内容から推定したものには〔 〕を付した。
- 3 資料5の複写写真については、撮影された資料の内容から建築科大行進のポスター、スケッチ、写真の順にまとめて、それぞれ年代順に枝番号を付した。

番号	区分	資料名	年代	作成／発行	点数	備考
1	図書	先生の思い出	昭和37年	村松四郎編、煙洲会発行	1	「市原」の印あり。
2	図書	中村順平先生米寿記念 中村建築教育の精神とその展開 日本古典建築遺構建築図画展に寄せて	昭和50年	近代家具発行	1	解説・評論：網戸武夫
3	文書	EXPERIENCE 経験 1・2・3	平成11年	網戸武夫著	1	『住と建築』誌に連載された「網戸武夫の住宅設計塾」全14回のコピーを綴じたもの。網戸武夫の事務所印あり。
4	〔中村順平生誕百年記念回顧展関係資料〕					封筒に「S62」「市原」の書き込みあり。
1	図書	箴言と省察	昭和62年6月	中村順平著、中村順平生誕百年記念回顧委員会編、建築知識発行	1	
2	紙票類	中村順平生誕百年記念回顧展	昭和62年		1	
3	葉書	建築家中村順平 生誕百年記念回顧展	〔昭和62年〕		2	
4	葉書	〔オペラ座スケッチ〕			1	
5	複写写真	〔中村順平〕			1	
6	複写写真	〔建築図画〕			2	「桃山期之研究」と「奈良法隆寺中門全景及断面詳細図」の2点。
7	文書	メモ「桧の旗に就て」			1	
5	〔建築科大行進関係複写写真〕					
1	複写写真	〔第4回建築科大行進「光ハ東方ヨリ」ポスター〕			1	原資料は大阪歴史博物館所蔵。
2	複写写真	〔第5回建築科大行進「大アジア主義」ポスター〕			1	原資料は大阪歴史博物館所蔵。
3	複写写真	〔第6回建築科大行進「文芸復興」ポスター〕			1	原資料は大阪歴史博物館所蔵。
4	複写写真	〔第7回建築科大行進「日本文化ノ独立」ポスター〕			1	原資料は大阪歴史博物館所蔵。
5	複写写真	〔第8回建築科大行進「芸術之歓喜」ポスター〕			1	原資料は大阪歴史博物館所蔵。
6	複写写真	〔第4回建築科大行進「光ハ東方ヨリ」山車デザイン〕			1	
7	複写写真	〔第4回建築科大行進「光ハ東方ヨリ」衣装デザイン〕			1	
8	複写写真	〔第4回建築科大行進「光ハ東方ヨリ」衣装デザイン〕			1	
9	複写写真	〔第5回建築科大行進「大アジア主義」山車デザイン〕			1	原資料は大阪歴史博物館所蔵。
10	複写写真	〔第5回建築科大行進「大アジア主義」衣装デザイン〕			1	

番号	区分	資料名	年代	作成／発行	点数	備考
11	複写写真	〔第5回建築科大行進 「大アジア主義」衣装デザイン〕			1	
12	複写写真	〔第6回建築科大行進 「文芸復興」山車デザイン〕			1	原資料は大阪歴史博物館所蔵。
13	複写写真	〔第6回建築科大行進 「文芸復興」衣装デザイン〕			1	原資料は大阪歴史博物館所蔵。
14	複写写真	〔第6回建築科大行進 「文芸復興」衣装・小道具デザイン〕			1	原資料は大阪歴史博物館所蔵。
15	複写写真	〔第6回建築科大行進 「文芸復興」衣装デザイン〕			1	原資料は大阪歴史博物館所蔵。
16	複写写真	〔第7回建築科大行進 「日本文化ノ独立」山車デザイン〕			1	原資料は大阪歴史博物館所蔵。
17	複写写真	〔第7回建築科大行進 「日本文化ノ独立」山車・衣装デザイン〕			1	原資料は大阪歴史博物館所蔵。
18	複写写真	〔第8回建築科大行進 「芸術之歓喜」山車デザイン〕			1	原資料は大阪歴史博物館所蔵。
19	複写写真	〔第8回建築科大行進 「芸術之歓喜」衣装デザイン〕			1	原資料は大阪歴史博物館所蔵。
20	複写写真	〔第8回建築科大行進 「芸術之歓喜」衣装デザイン〕			1	原資料は大阪歴史博物館所蔵。
21	複写写真	〔第8回建築科大行進 「芸術之歓喜」衣装デザイン〕			1	原資料は大阪歴史博物館所蔵。
22	複写写真	〔第8回建築科大行進 「芸術之歓喜」衣装デザイン〕			1	原資料は大阪歴史博物館所蔵。
23	複写写真	〔第8回建築科大行進 「芸術之歓喜」衣装デザイン〕			1	原資料は大阪歴史博物館所蔵。
24	複写写真	〔第8回建築科大行進 「芸術之歓喜」大道具・衣装デザイン〕			1	原資料は大阪歴史博物館所蔵。
25	複写写真	〔第2回建築科大行進 「ARS LONGA」行進風景〕			1	
26	複写写真	〔第3回建築科大行進 「精神文化之勝利」山車〕			1	
27	複写写真	〔第3回建築科大行進 「精神文化之勝利」行進風景〕			1	
28	複写写真	〔第4回建築科大行進 「光ハ東方ヨリ」山車と中村順平〕			1	
29	複写写真	〔第4回建築科大行進 「光ハ東方ヨリ」行進風景〕			1	
30	複写写真	〔第5回建築科大行進 「大アジア主義」山車〕			1	
31	複写写真	〔第6回建築科大行進 「文芸復興」山車と中村順平〕			1	
32	複写写真	〔第6回建築科大行進 「文芸復興」行進風景〕			1	
33	複写写真	〔第7回建築科大行進 「日本文化ノ独立」山車〕			1	
34	複写写真	〔パリ市大学街日本館 断面図〕			1	原資料は大阪歴史博物館所蔵。
35	複写写真	〔大東京市復興計画図〕			1	原資料は大阪歴史博物館所蔵。
6	文書	〔建築図画コピーファイル〕			1	〔横浜高工・工専建築学科 日本・西洋建築図画作品目録 昭和3年卒～昭和23年卒〕（編集：谷喜夫、平成4年5月）を含む。



資料4-5



資料5-1



資料5-2



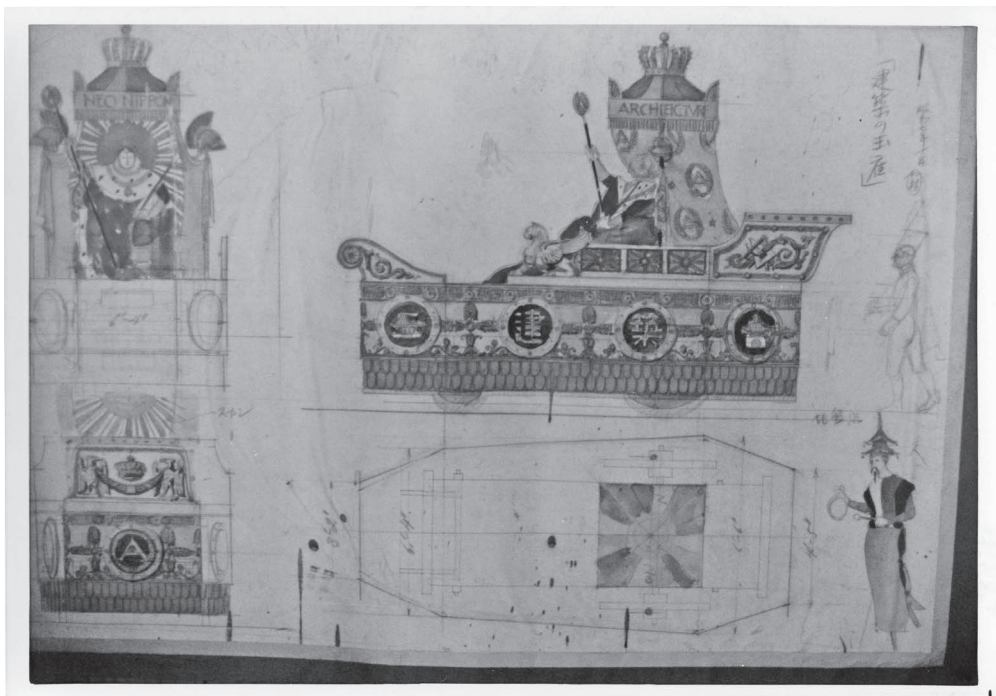
資料5-3



資料5-4



資料5-5



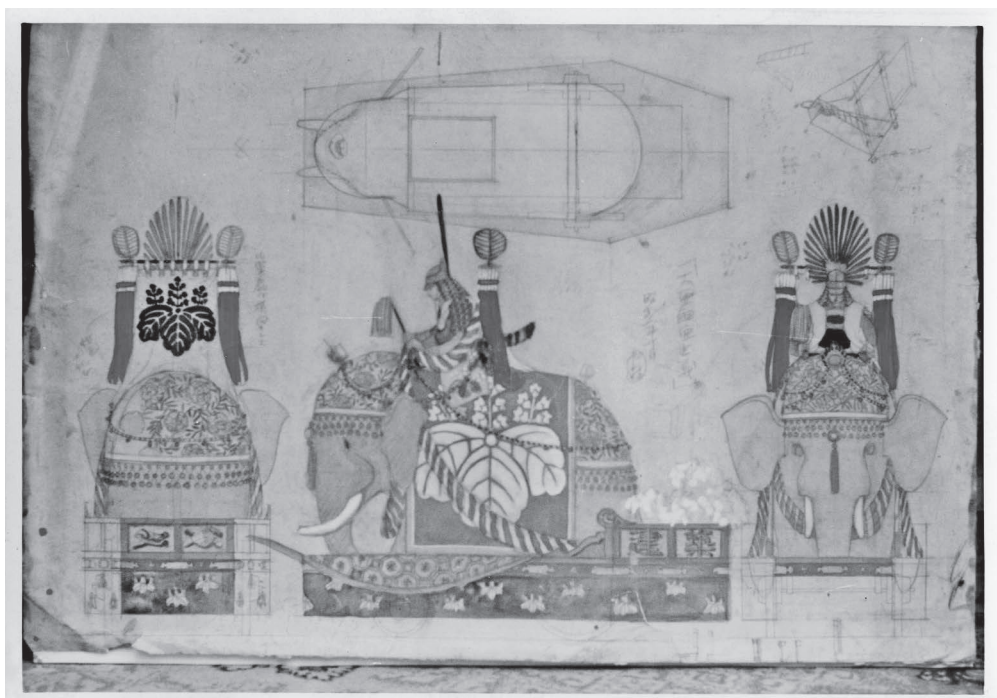
資料5-6



資料5-7



資料5-8



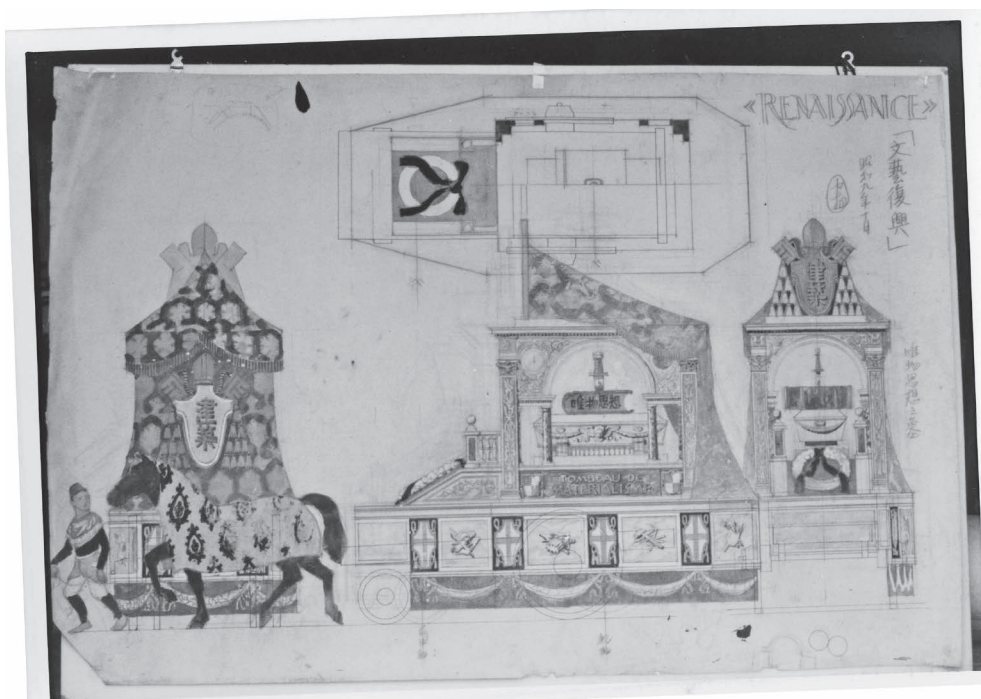
資料5-9



資料5-10



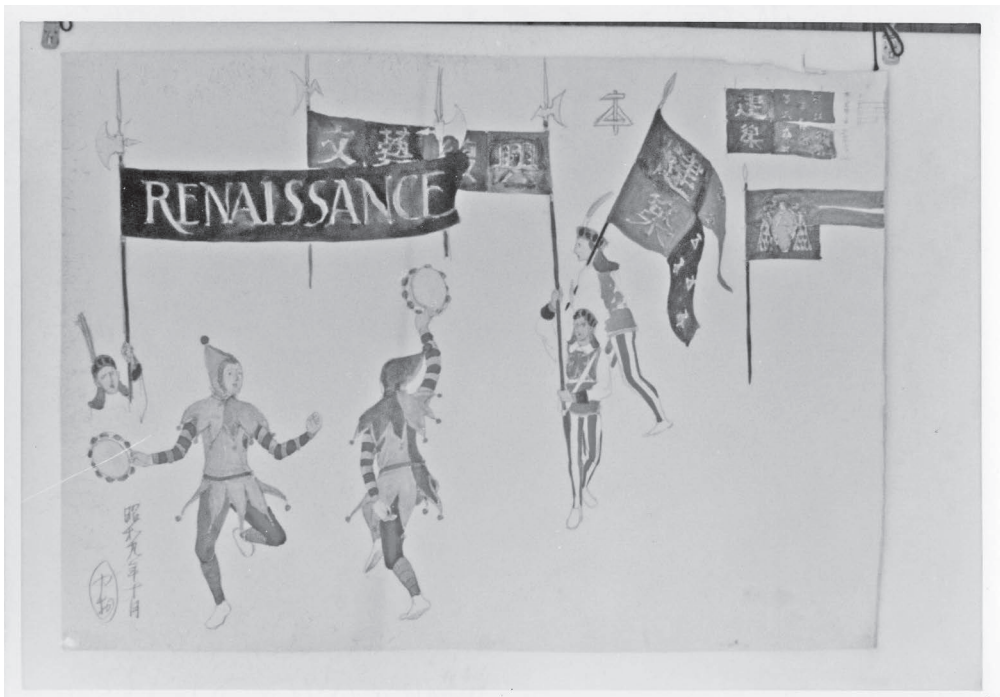
資料5-11



資料5-12



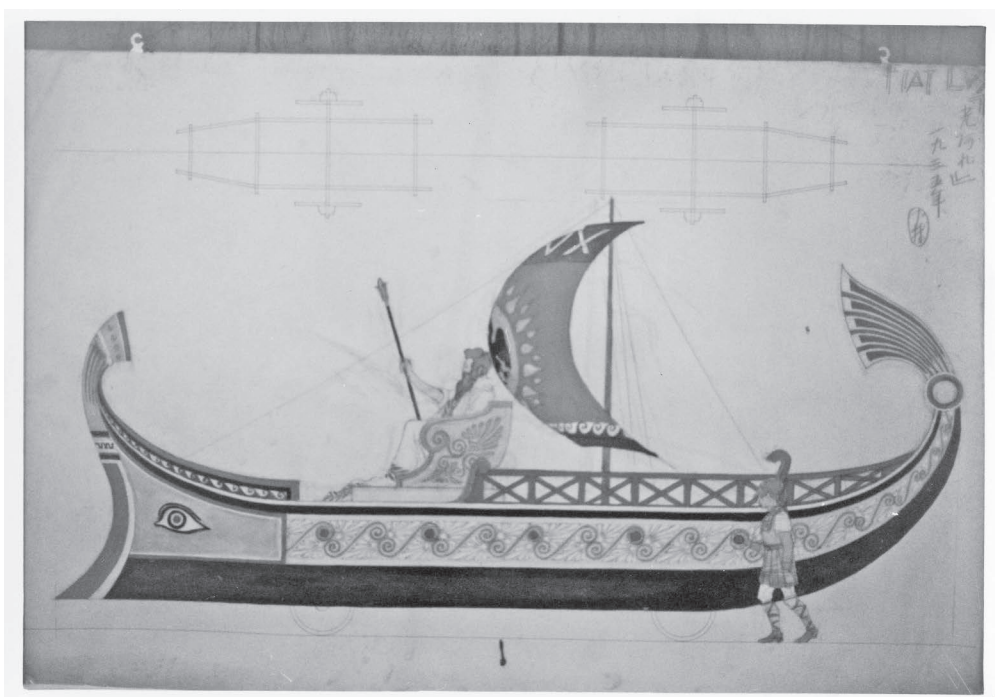
資料5-13



資料5-14



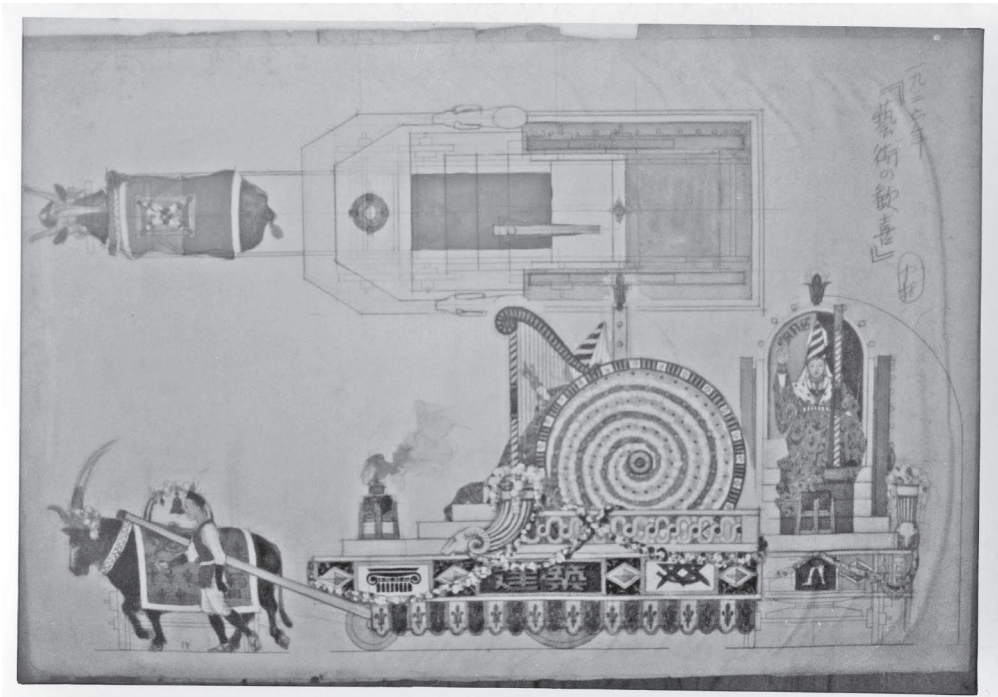
資料5-15



資料5-16



資料5-17



資料 5-18



資料 5-19



資料 5-20



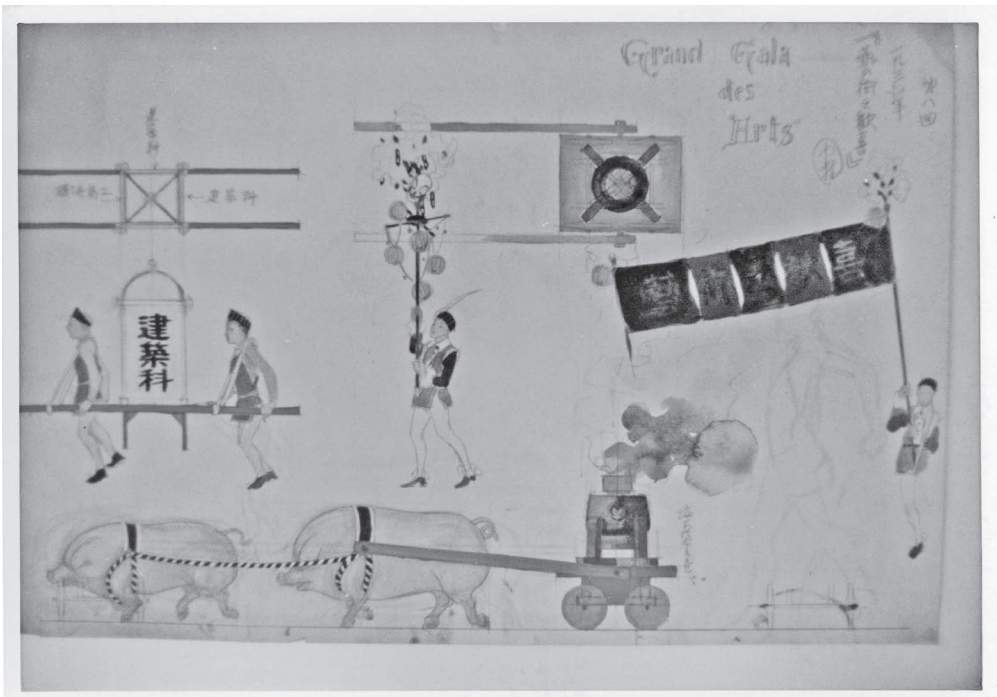
資料 5-21



資料 5-22



資料 5-23



資料5-24



資料5-25



資料 5-26



資料 5-27



資料5-28



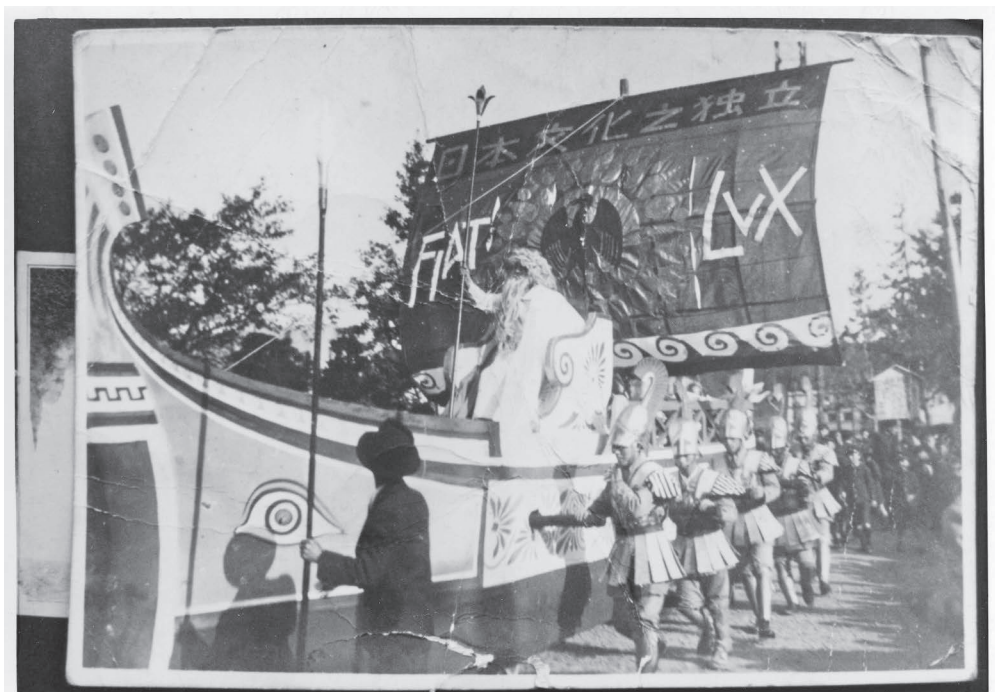
資料5-31



資料5-29



資料 5-30



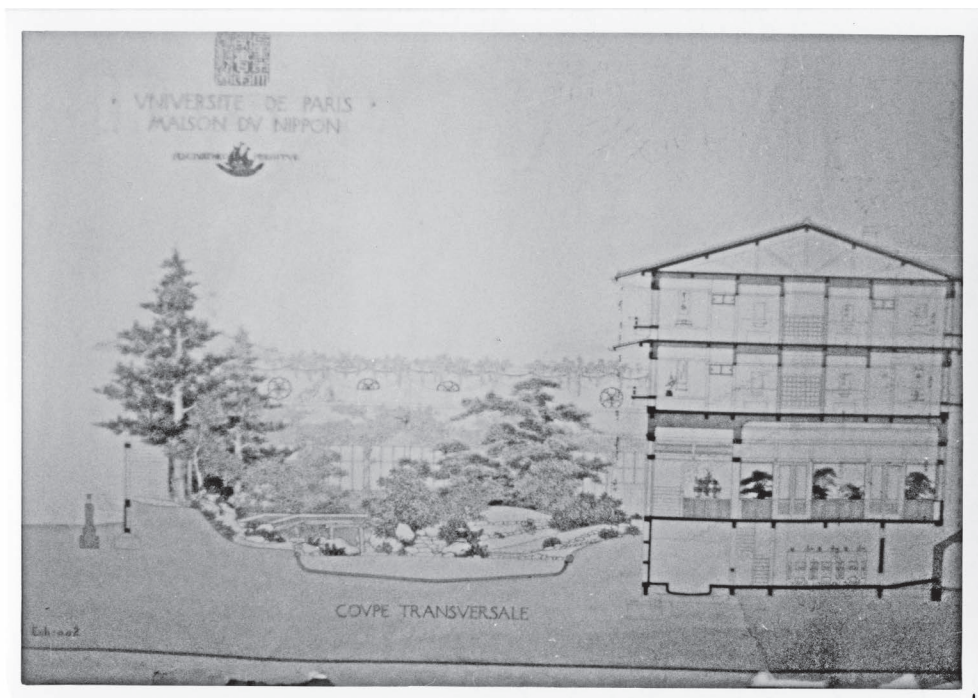
資料 5-33



資料5-32



資料5-35



資料5-34